

課題名：6. (4) サザエ資源の動向調査

事業名：沿岸漁業重要資源調査

予算額：8,517千円（単県）

期間：平成13年度～

主担当：増殖技術室（山田英明）

目的：

サザエの生態及び資源動向の調査を行い、結果を資源管理方策の検討材料とし、持続的な漁業生産の達成に資する。

成果の要約：

a) サザエの漁獲動向：

サザエは平成14年をピークに漁獲量の減少傾向が続いていたが、平成21年は減少に歯止めがかかり、平成22年は増加に転じた。全県的には減少傾向にあるものの、中山、泊、および酒津地区での増加が、全県的な減少傾向に歯止めをかけたと考えられる。

泊地区沿岸では平成20年生まれサザエが多く分布しているので、今後これらが漁獲加入してくると考えられるため、漁獲水準は現状を維持すると考えられる。

b) 御来屋サザエ漁場内のサザエ資源と餌料環境：

(1) 御来屋漁港から西方のサザエ漁場で近年、漁獲が減少しており、次期対象となる殻高5cm以下の稚貝の分布も低密度であった。

(2) 当該海域の餌料環境は、水深帯で異なり、水深10m以深ではワカメが消失する夏以降、ほとんど餌料となる海藻が繁茂していない。水深3～10mではヨレモクを中心とするホンダワラ類が優先し、水深8m～10m帯にのみ大型多年生海藻のクロメが点在している。全体的にみてサザエの餌となる海藻は少なく、漁場内での餌料環境はよくないと考えられた。

i) 試験の内容

a) サザエの漁獲動向：

漁獲統計を整理した。

b) 御来屋サザエ漁場内のサザエ資源と餌料環境

資源調査は、平成21年度および平成22年度にクロメを移植した名和川沖水深12m地点、水深9m地点の2箇所で行った。サザエの採集は、平成22年12月2日に潜水により実施した(2m×10m=20㎡)。

一方、サザエ漁場(御来屋地区)の餌料環境については、平成21年度の調査地点から名和川河口方向にさらに300mの距離の調査ラインを設け、調査を平成22年6月2日に実施した。

ii) 結果の概要：

a) サザエの漁獲動向：

平成22年の県全体のサザエの漁獲量は、170トン、86百万円と昨年より量で53t、額で16百万円増加した。これは、西部海域(淀江地先から赤碓地先)で漁獲が

大きく増加したことによる。一方、単価は低迷しており漁獲量の伸びに比べ金額の伸びは小さかった。

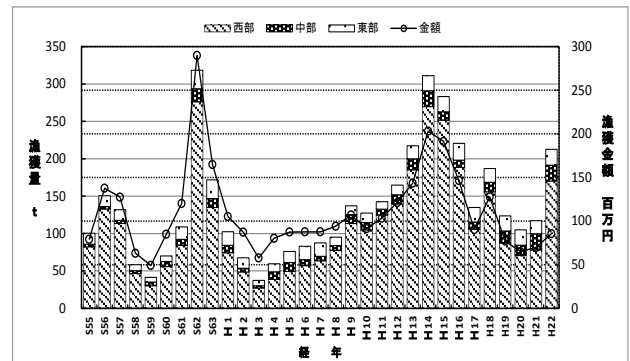


図1 鳥取県のサザエ漁獲量・漁獲金額の推移

b) 御来屋サザエ漁場内のサザエ資源と餌料環境：

(1) サザエ資源

名和川沖水深12m地点では殻高6cm以上の成貝の分布が少なく、水深9m付近(刺網の漁場とはなっていない水深帯)では、小型の貝は少ないものの殻高6cm以上の成貝は、水深12mに比べて分布が多い状況(F検定 $F=1.77 < 2.65$, $P > 0.05$)となっていた(表1)。

表1 水深別のサザエ生息状況 (H22. 12. 2)

殻高(cm)	名和川沖 WD9m(個)	名和川沖 WD12m(個)
1cm-	1	-
2cm-	-	-
3cm-	1	5
4cm-	-	2
5cm-	1	1
6cm-	8	2
7cm-	5	-
合計	16	10

(2) サザエの餌料環境

水深8.3mから名和川河口に向かって水深3.2mの地点までの約300mのライン上の海藻の分布は、ヨレモクが優先し、アカモク、ジョロモク、クロメが点在していた。クロメは水深8m帯までは点在したが、それ以浅の海域では見られなかった。また、水深が3mへと浅くなるにしたがって、小型の紅藻類(マサ等)が繁茂していた。植生被度はほとんどの地点で3(疎生:25～50%)であった。

成果の活用：

本試験で得たデータを解析しサザエの資源管理方策の検討材料として県漁協御来屋支所に情報提供した。

関連資料・報告書：

特になし